

巻頭言

今年も無事、*St. Paul's Librarian*をお届けすることができました。32号になります。

昨年の巻頭言に“本学司書課程の国際交流本格化の記念すべき一年”となったと書きましたが、2017年度もまた、国外から招へい研究員をお迎えするという大きなできごとがありました。

2016年夏、オハイオ州コロンバスで開催されたアメリカ図書館協会の年次大会で、サンノゼ州立大学の情報学研究科長であり教授である、サンドラ・ハーッシュ (Sandra Hirsh) 博士に出会いました。本学の招へい研究員制度を利用して、いつか、最善のタイミングで、最善の方をお呼びしたいと、考えていましたが、ハーッシュ博士の多くの人を惹きつける、そのご人格とエネルギッシュな様に魅了され、今、彼女を、お呼びすることが、本学司書課程にとって最善であろうと考えるようになりました。連絡をしたところすぐに日程調整をしてくださり、2017年10月に3週間ほど、本学に滞在してくださることになりました。本学内では学生に向けて、また学外では、前・司書課程特任教授の永田治樹先生が所長をお務めの株式会社「未来の図書館研究所」にて一般公開で、ほぼ同内容の講演会を開催することを中心に据えて、学内外の図書館関係者との交流をアレンジいたしました。ハーッシュ教授は、どこでも、熱心に日本の関係者の声に耳を傾けてくださり、熱い交流が実現しました。本誌冒頭に、講演会記録とハーッシュ博士の用意してくださった、学生との交流のための参考資料を掲載することができました。最新のテクノロジーの導入を積極的に進めるアメリカの公共図書館や図書館情報学教育の現状がよくわかります。ぜひお読みください。

今年度はまた、学内の学芸員課程の教員たちや図書館の職員の方たちとの主として研究上の交流も活発に行いました。そのひとつの成果が、11月に開催した公開シンポジウム「図書館・文書館の国際動向 2017」で、これには、アーカイブズ研究の第一人者である、天理大学教授の古賀崇先生をお迎えすることができ、また、本学池袋図書館の原修利用支援課長の登壇も実現しました。聴衆の大半は学生たちでしたが、国際的かつ、分野横断的な内容で、普段の司書課程の授業とは違った刺激を受けてくれたようです。

今号には、それらの二大企画に対する学生たちのリアクションと共に、例年同様、図書館実習報告等を掲載しています。図書館実習事前指導Ⅰでは、本学池袋図書館の小泉徹氏の講義が実現しました。長年の図書館勤務経験に基づいて、学生たちに、実習中にどのようなものを見方をしたらよいかをご指南いただいて、記憶に残るお話でした。図書館実習報告は、豊島区立中央図書館に一緒に行った二人に、異なる角度から書いてもらいました。学内外のみなさまからの、本学司書課程に対する、変わらぬ、ご理解とご協力に感謝申し上げます。

最後になりましたが、今年度末で、上田修一特別任用教授が定年退職となります旨、お伝えしなければなりません。上田教授におかれましては、4年間にわたり、本学の司書課程の授業その他の活動を図書館情報学のレベルに引きあげるべく、常にご尽力くださいました。心より御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

なお、諸般の事情から、本誌の印刷はふたたび、旧知の株式会社アライ印刷さんをお願いすることになりました。デザイン上の微調整もこの機会にさせていただき、きれいに仕上がりがうれしく思っています。

中村 百合子
(立教大学司書課程主任)